

博物館と地域の医療・福祉機関との連携

—— 英国、ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの高齢者プログラムを事例に ——

吉田 公子

博物館と地域の医療・福祉機関との連携

—— 英国、ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの高齢者プログラムを事例に ——

吉田 公子*

令和4年4月15日付で文化庁から博物館法の一部を改正する法律の公布が通知され⁽¹⁾、一部を除き令和5年4月1日に施行されることとなり、博物館の現場のみならず、学芸員養成課程をもつ諸大学においても、学芸員養成の教育指導に新たな展開が求められている。今回の一部改正の目的は、これまで博物館が果たしてきた基本的な役割・機能を果たしながら、博物館が社会教育施設と文化施設の双方の役割・機能を担うため、社会の変化に応じた博物館の実現を図るためとある。そのため博物館法の第1条の目的に、社会教育法に加えて、文化芸術基本法の精神に基づくことが定められた。博物館の事業については、第3条第3項で、「当該博物館が所在する地域における教育、学術及び文化の振興、文化観光その他の活動の推進を図り、もって地域の活力の向上に寄与するよう努めるものとする」とある。「その他の活動」については留意事項で、福祉分野における取組があげられている。このように、今後は博物館が学校との博学連携だけでなく、福祉分野における取り組みなどを通して、コミュニティの衰退や孤立化、高齢化問題の解決が期待されていることが明らかとなった。

本稿では、今回の改正博物館法の中でも博物館と福祉分野がどのように連携できるのか、海外の動向を踏まえ、英国のダリッチ・ピクチャー・ギャラリーでの高齢者プログラムの事例を参照する。そして、これらの博物館を取り巻く状況において、本学の博物館実習でどのような活動をしているのか、まだ始まったばかりであるが、本学美術館と近隣のリハビリテーション病院との連携に実習生が参加した事例などを紹介する。

1) 海外での動向について

欧米では、2019年11月に世界保健機関（WHO）欧州地域事務局によって「健康と幸福感の増進における芸術の役割に関するエビデンスとは？」という報告書が出された⁽²⁾。報告書のテーマは、美術、音楽、文芸、演劇、映画などの芸術と健康の関係についてである。この報告書では、2000年1月から2019年5月までの英語およびロシア語による芸術関連の医学文献について、それらが900以上あり、そのうち3000以上の研究やレビューなどについて検証されている。国際社会では2000年頃から、美術作品の鑑賞や音楽などの幅広い芸術活動が、疾病予防や健康増進に及ぼす影響について関心が持たれていたことがわかる。視覚的芸術作品の鑑賞がストレスに及ぼす影響に関しては、2006年に英国のウェストミンスター大学のAngela Clowがロンドンのオフィスワーカーを対象に行った実証実験例が紹介された。Clowは、質問紙を用いた主

*九州産業大学美術館

観的なストレスチェックと、唾液に含まれるストレスホルモンであるコルチゾールを検査する方法で実証実験を行った。その結果、昼休みに短時間でもアートギャラリーを訪問することが、コルチゾールのレベルを正常値に近づけることが分かった（Clow, 2006）⁽³⁾。日本でも、それに先立ち2001年にメナード美術館でコルチゾール検査による生理測定と、心理測定によって芸術鑑賞がストレスに影響する実証実験を行った⁽⁴⁾。その結果、鑑賞後のコルチゾールの低下がみられることや、心理測定の分析では「心理ストレス感」と「否定的感情」項目が減少したことを測定した。WHOによる本報告書では、健康と福祉を向上させる芸術活動の役割についてエビデンスが蓄積されつつあるが、調査研究方法が規模の大小から、手法に至るまで多種多様であるため、エビデンスの質にもばらつきがあり、確認や理解が不十分な点もあると指摘している。緒方泉は博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進・疾病予防に活用する活動を「博物館浴」と定義し（緒方, 2020）、2020年9月から九州・沖縄地域を主として、2023年1月までに約40を超える博物館と協力を得て、心理（POMS2）・生理測定（血圧／脈拍）による研究手法や、実験手順などの統一化、標準化を行い、実証実験を進めている。現在のところ、「博物館浴」の実証実験で分かったことは、見学時間が30分、20分、10分でもリラックス効果に影響があったことや、歴史系、考古系、美術系、自然史系など館種によっても、リラックス効果に影響を与えること、「低血圧」の人の数値は上がり、「高血圧」の人は数値が下がるという恒常性に向かう傾向が見られるなど、博物館体験が健康に良いことが数値によって、分かってきた。「博物館浴」の実証実験はメディアや経済産業省にも注目され、知られるようになり、全国さまざまな博物館で実証データの収集が広がりをみせてきている⁽⁵⁾。

2019年に発行された英国のArt Fundによる報告書Calm and Collectedでは、63%の人がストレス解消のために博物館やギャラリーを訪問していることがわかった。しかし、そのうち月に1回ほど定期的に訪れているのはわずか6%であり、約49%が1年に1回ほどの訪問であった。この調査では、定期的に博物館を利用する人は、自分の人生への満足度や自己肯定感が高いことが認められることも検証された。そして、実は調査対象者の51%の人が今後、博物館、美術館を活用したいと回答していた。この報告書では、博物館が活用される役割を担っており、博物館は未開拓の資源であると明らかにしている⁽⁶⁾。

英国のMuseum Nextが主催しているオンラインサミット「ミュージアム、ヘルス アンド ウェルビーイング」が、2022年1月31日から2月2日にかけて行われ、英国、米国、オランダ、スイス、シンガポール、台湾などの博物館、美術館が参加し、医療福祉機関と連携した26のプログラムを報告した。このサミットでは、博物館、美術館はストレスと戦い、社会的孤立を減らし、自尊心を高め、さらに長生きにつながる可能性があるとして掲げている。同サミットは、引き続き2023年2月6日、7日にも予定されており、継続的に取り組んでいく強い姿勢が感じられる。

以上のように近年、ますます博物館が健康や幸福感に寄与できる資源として注目され、活用されてきていることがわかる。

2) 英国のダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの高齢者プログラム

では、英国の先進事例として、ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーにおける高齢者プログラ

ムについて、筆者が2019年11月6日に行なった視察を紹介したい。

ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー（以下、ダリッチと略）は、ロンドン南部のサザーク区にあり、1817年に開館した英国最古の公共美術館である。高齢者プログラムの調査では、ダリッチのヘッド・オブ・プログラム・アンド・エンゲージメントのジェーン・フィンドレーさんと、高齢者プログラムの企画担当者のケリー・ロビンソンさん、そして同じく高齢者プログラムを担当するアーティストのルーシー・リベイロさんにインタビューを行い、高齢者プログラムのAging Wellを実際に見学した。

このプログラムについて、①企画の経緯、②実施方法、③評価方法をみてみよう。

①企画の経緯

プログラムの企画は9ヶ月ほど前から準備が始まり、プログラムを担当するファシリテーターは有給によってアーティストが務める。始めに参加者である、サザーク区を中心とした高齢者を対象に、興味関心があることを主にしたニーズ調査が行われ、ニーズ調査をもとにプログラムのテーマが形成される。ダリッチは、そのテーマに最も適すると思われるアーティストを、これまでのプログラムに関わったアーティストの名簿より調整し、ファシリテーターを決定する。ダリッチの高齢者プログラムでは、ダリッチがハブとなってプログラムのテーマに適したアーティストと、コミュニティのNHS（英国の国民保険サービス）の看護師、作業療法士が協同している。ダリッチは担当するアーティストと事前に、参加者のニーズについて十分に共有した上で、地域のNHSの看護師や作業療法士に参加者の体調や症状と、症状に適した活動に関する情報の提供を受けたうえで、プログラムの活動内容を企画する。

②実施方法

実施場所はダリッチの展示室を使うこと、と同時にダリッチ外のコミュニティセンターなどでも実施できるかどうかもポイントである。参加者の人数は、付き添い者を含めて最大でも15名とされている。担当のアーティストを中心に、ダリッチのボランティアスタッフ、施設の付き添い者が活動をサポートする。プログラムの開始時間は、日常生活のリズムに合わせて午後2時から開始して約90分行い、活動の間には、必ずお茶の時間が設けられている。では、実際の活動の様子を時系列に追ってみよう。

筆者が見学した2019年11月6日にダリッチで実施された高齢者プログラムAging Wellでは、アーティストのルーシーさんが担当であった。そして、ダリッチの高齢者プログラム全般の運営とアーティストやNHSの看護師のコーディネーターの役割を担当するのがケリーさんである。

参加者はリフト付きのバスで到着後、セミナールームに移動し、大きなテーブルを囲んで、参加者と付き添い者が交互に着席し、お互いの顔が見えるように座った（写真①）。

最初に一人ずつ自己紹介を行い、ルーシーさんは参加者の様子を通して、プログラムの微調整を行っていた。高齢者プログラムAging Wellは、自らが「体験する」ことを重要視している。この時プログラムでは、ダリッチで開催中の特別展「レンブラントの光」展を見学する目的があった。はじめにルーシーさんは、参加者に対してレンブラントの銅版画の図版を見せながら、



①お互いの顔が見えるように参加者と付き添い者が交互に着席。

これはどうやって作ったのかな？と質問を投げかけた。そして銅版画で使う道具を紹介し、たとえば蜜蝋など匂いを嗅いで、ほら、どうですか？と参加者に手渡し、匂いや触覚という五感の体験を全員で共有した。次に、どんな物語が描かれているか？と視点を広げ、ルーシーさんは、図版を観察するように促した。参加者の隣に付き添い者が並んで座り、ルーシーさんの問いかけを受けて、参加者に話しかけ、一緒に活動をサポートしていた。

観察ののち、ルーシーさんは、この作品の物語を劇のように机をコンコンコンと叩いて、ドアの音を表現し、パフォーマンスをした。すると、セミナールームの雰囲気が一変して、物語の世界に引き込まれていった。視覚だけでなく聴覚も刺激される体験であった。続いて、レンプラントの光の表現について、道具を使って体験し、ハンズオンを繰り返した。光を反射する、逆に光を吸収する布を自分の顔に近づけてみて、お互いにどのように見えるか体験した。付き添い者も積極的に参加して、私の顔が輝いて見える？など活発な発話が生まれ、楽しんでいる様子が伝わってきた。

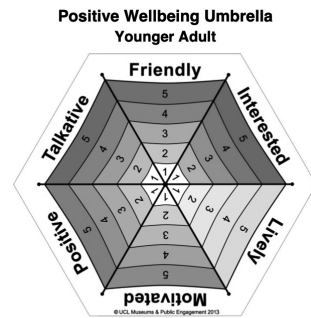
ここまでが展示室へ行くまでの前半の活動であり、紅茶とチョコレートブラウニーやクッキーなどを食べて休憩をした。前半の活動で表情もほぐれて、お茶の時間は笑い声とおしゃべりが続いた。普段の施設での生活のリズムと合わせて、どんなプログラムでもお茶の時間を作り、大切にしているようだ。この時間に、ルーシーさんは、付き添い者と後半の活動について打ち合わせも行っており、この細やかさが参加者の満足度、評価につながると感じた。

お茶の時間の後、後半は展示室に移動して、セミナールームで、みんなで体験したり考えたりした作品を実際に見学した。展示室でもルーシーさんは、それぞれの参加者と付き添い者に声かけをして、セミナールームでの体験を思い出すような身振り手振りで鑑賞を促していた(写真②)。

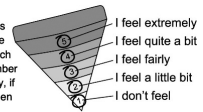
展示室で30分ほどゆっくり過ごした後、セミナールームに戻り、ルーシーさんは参加者に「今日はどうだった？」と話しかけて、ロンドン大学が開発したアンブレラシートのアンケートを活用して、振り返りを行った。アンブレラシートは、6つの質問項目を六角形に沿って、くるくる回しながら、まるで囲んで記入するもので、高齢者に限らず、小さな子どもでも簡単にできる評価方法である(写真③)。本学美術館でも子供用の日本語版を作り、ワークショップな



②ルーシーさんは、セミナールームでの体験を思い出すように身振り手振りで鑑賞を促す。



Six words are printed around the edge of this umbrella. Please score how much you feel each word by circling a number from 1 to 5, e.g. 'Lively, if you feel fairly lively, then you should circle 3.



③ロンドン大学が開発したアンブレラシートのアンケート。(7)

どの評価で活用している。

プログラムはダリッチのスタッフが、参加者がバスで帰るところまで見送りをして終了した。

③評価方法

プログラム全体に関する評価方法は、参加者については上記のアンブレラシートを使う。付き添い者には、プログラム終了後に質問紙を使用する。質問紙は5段階評価と記述式で構成されており、参加したプログラムについて、内容、効果、スタッフ、施設利用面に関する項目で構成されている。特に興味深いのは、「歓迎が感じられ、包摂性のある体験だったか。」「幸福感がもたらされたか?」というものである。プログラムによる効果についてはプログラム実施後に、1ヶ月から1年にわたる長期の評価も行っている。また、付き添い者にも「自分自身がプログラムの体験によってどのような気持ちになったか」などがあり、付き添い者の体験についての評価も重視していることがわかる。ルーシーさんら、プログラム担当者、ボランティアスタッフの評価は、プログラム直後に行う。質問紙を使用するが、5段階評価ではなく記述による記録を行っている。ケリーさん、つまりダリッチは参加者と付き添い者の評価、そして、プログラムを担当したルーシーさんらの評価を集約して、総合的な評価を行い、次への改善につなげて行く。さらに第三者評価機関による調査を依頼することもあるそうだ。評価は、プログラムの運営のための外部資金の獲得にも影響するため重要であり、大変だけど励みにもなると話してくれた。

インタビューと見学を通して実感したことが二つある。一つ目は、ダリッチは企画から実施、評価に至るまで関係者を繋ぐハブとなり、参加者のニーズに合うように、様々な情報を細やかに共有し、信頼関係を築いていることである。中でも、プログラムを実際に担当するファシリテーターであるアーティストは、ダリッチで高齢者の行動様式や心理などの研修を受けて臨んでいる。したがって、今回のルーシーさんも、お互いの顔が見える安心感を生む座り方、付き添い者が参加者の交互に配置することなどの環境整備がなされていた。二つ目は、ファシリテ

ーターがアーティストであることである。ダリッチは、実際に制作活動を行うアーティストをファシリテーターにすることによって、制作技法をはじめとする十分な作品理解を前提にして、触る、匂いを嗅ぐ、音をきくなど五感を刺激する活動内容を計画している。常に表現と向き合い、素材と対話している制作者であるアーティストならではの作品への気付きや、アプローチに説得力が感じられ、参加者へのより深い体験の提供になることがうかがえた。ダリッチの博物館活動のミッションは「ポジティブな変化の媒介者となり、人びとの生活と芸術を結びつけながら、より健全で幸せなコミュニティを創出することにある」だという。こうしたミッションの思いが、参加者の健康や幸福感へつながるプログラム実現に向けた原動力になっているように感じた。

3) 本学の博物館実習の活動内容について

最後に、ダリッチでの高齢者プログラムなどにみられるように、今後、博物館と医療・福祉機関との連携が期待される中で、本学の博物館実習でどのような活動をしているのか、一部紹介したい。本学の博物館実習は、平成29年に放送大学と連携博物館実習を締結し、令和4年度は、放送大学生9名と他大学生1名（筑紫女学園大学）、本学学生13名の合計23名の受講者があった。博物館実習のカリキュラムでは、学芸員の基本的で重要な4つの技術「調べる」「守る」「伝える」「みせる」の習得を目指している。令和4年度博物館実習の活動は、次頁の表のように14日間（14回とカウントする）と反転学習を4回行った。内訳は、事前指導1回、対面による実務実習8回、見学実習3回、教育プログラム1回、事後指導1回、オンライン学習教材「学芸道」（本学企画制作）などを用いた反転学習4回である。

博物館実習のカリキュラムは「調べる」技術の習得から始め、「調べる」技術の深度が「守る」こと、「伝える」こと、「みせる」ことに有機的につながるよう計画している。ダリッチの事例でもみたように、展覧会のみならずプログラムの企画の基になる作品・資料についての情報の質と量が利用者へ還元されるため、近年の博物館実習では特に「調べる」技術を重視している。「調べる」技術の実習活動では、受講生はアイマスクをして視覚だけに頼らず、触覚や嗅覚による観察の方法も学ぶ（写真④）。五感を使った調査方法では、例えば毛糸などを用いて触覚に意識を傾け、その体験を通して、生まれる動詞を書き出し、素材の特徴や制作技法を発見する。また、これらの身体感覚をオノマトペを使って言語化して、キャプションや解説パネルなどでわかりやすく「伝える」技術を学ぶ。さらに、美術作品の作品理解については、言語化できないことを身体表現による劇を作るなどの活動から、作品へのさまざまなアプローチを学ぶ。受講生の日誌や博物館実習の報告書によると、受講生はこれらの活動を通して、作品をみる、感じる、そしてそれらを言語化して書く、話すという内化と外化の往還運動によって、作品への新たな気付きになったようだ。「調べる」技術が豊かになれば、ダリッチのように深い作品理解をもとにして、高齢者プログラムのより良い企画にもつながっていくと期待している。

令和4年度 放送大学と連携した九州産業大学学芸員養成課程「博物館実習」日程表

回	実施日	活動内容
1	4月23日(土)	【事前指導】 受講ガイダンス、オリエンテーション。
2	4月24日(日)	【見学実習】 博多寺社巡りと福岡アジア美術館を見学。博多寺社巡りでは、地域に所在する文化財や伝統的建造物群と、まちづくりについて理解を深める。福岡アジア美術館ではコレクション展を見学し、博物館の活動の理念とコレクションの方針がどのように展示に反映されているか学ぶ。
3	5月14日(土)	【実務実習(調べる・伝える技術)】 「毛糸で表現遊び」「オノマトペ鑑賞」「VTS鑑賞」「ポージングからドラマを考える」などの体験を通じて、五感を取り入れた調査や鑑賞方法を学ぶ。
4	5月15日(日)	【実務実習(伝える技術)】 1960年と2015年のユネスコ博物館勧告を読み比べ、今後の博物館像を考える。博物館法の一部改正によって、今後の博物館活動は何か期待されるのか考える。「あなたのための博物館教育プログラムを考える」をテーマに、多様性、包摂性を考慮した教育プログラムをグループで企画立案し、発表を行い、「ユネスコ博物館勧告」の意義を理解する。
5	5月16日(月)～ 5月25日(水)	【反転学習(守る技術)】 オンライン学習教材「学芸道」(本学企画制作)の「梱包材」「茶器」「仕覆」「掛軸」「仏像(手)」「仏像(頭)」を視聴する。視聴前に気付かなかった事を踏まえ、作品・資料を慮る取り扱いや梱包の動作、所作、コツをまとめてレポートを作成する。
6	5月16日(月)～ 5月27日(金)	【反転学習(調べる技術)】 自宅にある「私のコレクションー大切な一品ー」を調査対象とし、調査カードを作成する。
7	5月28日(土)	【実務実習(調べる技術・守る技術)】 反転学習で作成した調査カード「私のコレクションー大切な一品ー」を用いて、調査カードの基本的な項目を確認する。作品を注意深く観察して得られる、形状と状態に関する情報が、安全な梱包に繋がり、展示の企画や展示作業へつながることを学ぶ。午後の活動では、翌5月29日の作品梱包実習の事前学習として、グループで「学芸道」の読み合わせと梱包の手順のポージングを行い、梱包実習の課題を明らかにする。
8	5月29日(日)	【実務実習(守る技術)】 ヤマト運輸株式会社美術品輸送専門業者の講師による「梱包材」「茶器・仕覆」「掛軸」「仏像(手)」「仏像(頭)」の梱包実習を受ける。
9	5月30日(月)～ 6月13日(月)	【反転学習(守る技術)】 「学芸道」を再視聴する。対面活動での梱包実習の体験を通して、難しかった動作や所作について振り返りを行い、レポートを作成する。
10	6月25日(土)	【実務実習(守る・見せる技術)】 博物館における照明の基本について、実際に博物館用のハロゲン球とLEDライトの取り付けを体験し、色温度や照度、演色性を比較する。大学美術館の展示室も見学し、実際の展示室の照明の在り方について理解を深める。次回6月、7月に取り組む展示計画案の作成について、事前学習として展覧会を構成する要素の確認、展示空間における身体感覚を意識するために「私のモジュール」の作成、大学美術館の展示室平面図に利用者の動線と作品・資料、情報の位置関係を可視化して、相互の関係性を検証する。

回	実施日	活 動 内 容
11	6月26日（日）	【見学実習】 福岡アジア美術館での見学実習。ワークシートを活用して「アニメージュとジブリ展 一冊の雑誌からジブリは始まった」展を見学する。展示空間における身体感覚を高め、展示のストーリーが展示空間においてどのように表現されているのか、展示空間における利用者の動きと作品の配置、情報の関係性への理解を深める。
12	7月9日（土）	【実務実習（見せる技術）】 博物館における展示の意義と、展示制作の基本について何を（WHAT）、誰に（WHO）、どのように（HOW）伝えるのか、グループによる展示計画案制作の実践活動を通して学ぶ。グループで大学美術館にて「開館20周年記念 第32回九州産業大学美術館所蔵品展—優品でたどる芸術と時代—」展の作品調査を基に、展覧会のコンセプトを話し合う。展覧会のストーリー、章立て、骨格を明らかにする展覧会絵巻を作成し、展示室図面に落とし込んで、シミュレーションを試みる。
13	7月10日（日）	【実務実習（見せる技術）】 7月9日に作成した展示計画案をコンセプト、ゾーニング、作品の配置の間隔やリズム、車椅子などに配慮した適切な動線等のチェック項目と照らし合わせて、ブラッシュアップする。最後にグループ毎に展示計画案の発表を行い、相互評価をフィードバックし、振り返りを行なう。
14	7月11日（月）～ 7月24日（日）	【反転学習（見せる技術）】 「学芸道」のコンテンツにある「展示活動のプロセスを学ぶ」の視聴を行い、展示活動のプロセスについて新たな気づき、展示活動において第一に優先される事をまとめる。
15	9月24日（土）	【実務実習（見せる・伝える技術）】 7月に企画した展示計画案を素材にしたチラシ作成の実践を通して、展覧会のチラシの重要な要素と、効果的に伝えるためのコピーライティング、デザインなどのスキルを身につける。
16	各日程に参加	【教育プログラム実習】 大学美術館主催する教育プログラム（地域の医療・福祉機関との連携事業など）に1回参加し、活動のサポートを体験する。
17	12月3日（土）	【事後指導】 博物館実習報告会を行う。本年度の実習生が実習成果を共有すると共に、次年度博物館実習を希望する学生が実習に備えた心構えを養う。九州産業大学出身の学芸員等を招聘し、地域社会の中での博物館の役割について意見交換を行う。
18	12月4日（日）	【見学実習】 TOTOミュージアムと北九州市立自然史・歴史博物館 いのちのたび博物館を見学する。実習の総合的なまとめとして、実習生の主体的な見学を促す。最後に全員が発表を行い、博物館活動に関する多様な視点を共有して、今後の博物館活動について理解を深める。

また、令和4年度の博物館実習では教育プログラムの実習活動として、本学美術館が取り組んでいる地域の医療・福祉機関との連携事業に、実習生が参加した。その一例として6月24日に本学美術館と、近隣のリハビリテーション病院との連携で行ったプログラム「おでかけ鑑賞会」がある。コロナ禍のためオンラインで2回実施した。1回目は病院職員4名、本学美術館学芸員3名、博物館実習生2名で、参加者は患者5名であった。2回目は病院職員4名と本学



④アイマスクをして、触覚や嗅覚を研ぎ澄ませて資料を調べる。

美術館学芸員3名、博物館実習生2名で、参加者は患者6名であった。参加者は、まず皆で画面越しに本学の立体作品「アルテミシオンの像（紀元前460年、レプリカ）」を観察して、作品のポーズを真似して、身体のストレッチを行った。その後、この立像は何を持っているのだろうか？という問いかけを介して、相互にコミュニケーションを楽しみ、立像が手にしているものを描画で表現する活動を行った。実習生の日誌を読むと、プログラムの事前準備において、連携する関係機関と情報を共有することの大切さや、プログラム当日に実際に参加してみて、画面越しのコミュニケーションでの表情や声のトーンの工夫など課題と改善点を学んだようである。このような連携事業に、博物館実習生が参加するのはまだ始まったばかりである。今後、博物館実習が博物館と地域の医療・福祉機関の実践的な学びの機会となるように努め、学生教育に寄与したいと思う。そして、本学では緒方泉教授（本学地域共創学部）による先進的な研究活動として「博物館浴」の実証研究や、現職の学芸員を対象にした学芸員研修会によるリカレント教育、医療・福祉従事者と高齢者、博物館をつなぐリンクワーカーの人材養成の研修会などを文化庁の助成金などを活用して行なっている。これからも地域の博物館と、学芸員、医療・福祉従事者とのつながりを深めながら、共に博物館の未開拓な資源を開拓していきたい。

※本稿は2022年10月28日に開催された全国大学博物館学講座協議会西日本部会大会の研修会「博物館の現場と学芸員教育とをつなぐ」で発表したものを基に作成した。

- (1) 文化庁「博物館法の一部を改正する法律の交付について（通知）」, Retrieved from https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/kankei_horei/pdf/93697301_04.pdf 2023年1月14日確認
- (2) Retrieved from <https://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/329834/9789289054553-eng.pdf?sequence=3&isAllowed=y> 2023年1月14日確認
- (3) Retrieved from https://www.researchgate.net/publication/252281628_Normalisation_of_salivary_cortisol_levels_and_self-report_stress_by_a_brief_lunchtime_visit_to_an_art_gallery_by_London_City_workers 2023年1月14日確認

- (4) Retrieved from <https://museum.menard.co.jp/outline/healing.html> 2023年1月14日確認
- (5) 緒方泉 (2021)「博物館浴によるリラクセス効果の検証—超高齢社会に向けた博物館の新たな役割を考えるために—」,「地域共創学会誌」vol.6,p55-72
- 緒方泉 (2022)「博物館浴」の生理・心理的影響に関する基礎的研究(3):博物館学を「学ぶ大学生」と「学ばない大学生」を事例として「地域共創学会誌」vol.9,p48-76
- (6) Retrieved from <https://www.artshealthresources.org.uk/wp-content/uploads/2021/01/2019-calm-and-collected-wellbeing-compressed.pdf> 2023年1月14日確認
- (7) Retrieved from https://www.ucl.ac.uk/culture/sites/culture/files/ucl_museum_wellbeing_measures_toolkit_sept2013.pdf 2023年1月14日確認